

## 戦中の暮らしと終戦

匿名希望（当時、13歳頃の話）

私は終戦を13才で迎えました。8月15日、お参りに行っていると芝居小屋が閉まりみんな家へ帰りません。その途中兵隊さんが「アーアー」と声を出して泣いています。家に帰ると玉音放送で終戦を知らされ驚きました。

戦時中は小学校へ行く30分の道程、皆はき物もなく全員「はだし」で通いました。今と違って舗装された道路でもなく、足裏がじゃり道に当たって痛かったです。真夏は熱く、冬はわら靴でした。

学校帰りお腹がすいて、途中の畠で桑の実を他人の畠で採って食べたり、スカナ（※すかんぼ・イタドリ）という雑草を食べたりしてお腹をふくらましました。食料確保の為に田圃で「いなご」をとって「ふくべん」（※イナゴ取り用の道具）という竹製の入れ物一杯とり、夜、家で母が熱湯でゆがいてくれ、手や足を取って、醤油と砂糖で炊いてくれ、辯当のおかずでした。毎日毎日いなごです。又田圃にいる「つぶ」（※タニシ）という貝の一種を採り、ゆがいて中をとり出して、家族10人のおかずとなりました。山でわらびを取ったり、きのこやふきをとったり、食糧の手助けをしました。大人達が働いている間、子供も大働きをしたのです。

家の近くの山では兵隊さんが訓練をしていて緊張した毎日でした。子供も学校から帰ったら家業の手伝いをし、土管を運んだり、燃料の木を運んだりして手伝ったものです。